

牧久雄家文書目録と目録作成について

1 牧久雄家は、山三の屋号を持つ江戸後期からの豪商牧茂助の後継にあたる。牧茂助家は、呉服商と質貸しを行っていた山一「牧新一家」の一族で、初代茂助は本家と一体で質貸しや資金の貸付などに携わる一方、生糸の買付けも行っていた。

安政6年(1869)の横浜開港の翌年、万延1年(1860)に糸仲間に加え、善光寺平一帯から生糸を買い集めて横浜や上州に大量に出荷した。その後も糸仲間の行司(世話役)として須坂地方の製糸業の発展に尽力し、明治6年(1873)に須坂生糸改会社社長に就くと、生糸製造規定をつくって品質向上を勧めた。

明治16年(1883)1月に跡を継いだ二代茂助は、明治18年(1885)に俊明社が東行社から分離したあと、牧新七家とともに東行社に加入し110釜を経営した。さらに引き続き質貸し、資金の貸付、不動産取引などを行い、明治20年(1887)の製糸用水に給する水道の敷設に資金を融資している。その他、大正期には河東鉄道株式会社や須坂索道株式会社等の株主、監査役になっている。行政面では県会議員2期、町会議員7期を務めた。

後継の茂助は、昭和17年(1942)に須坂町収入役を務め、戦後21年(1946)には警防団長に就き、自動車ポンプの採用など消防の機動力化をすすめた。

2 牧久雄家文書は、以上の歴史的経緯を経て残された文書で、現在は同家が保管する文書として受け継がれてきている。

本文書中、安政7年1月の「店卸調覚帳」は、横浜開港直後に生糸を集荷して横浜と上州へ移出したり、糸仲間に生糸・繭の仕入金を融資していたことが記されていて、開港直後の実態の一端がわかる貴重な史料である。明治期には9年から33年まで連年の貸借金店卸簿があり、「店卸累年比較表」とともに金融関係の資料としてこれも貴重である。製糸関連では、明治初期の生糸輸出状況・売込商人等を記載した明治11年「横浜生糸改会社輸入高表」、同14年の東行社と第二十四銀行との荷為替・前金借用の約定書がある。その他、河東鉄道の創立の経緯が記されたもの、同12年に千曲川通船で新潟米が運ばれていたことを記した文書もある。

目録化した史料のほとんどが、借入金証書、田畑売渡し証文、預り金証書や貸借関連の訴訟等で占められ、製糸関係、出資事業、家事の記録などは少ない。

3 これらの史料を「牧久雄家文書」として目録を作成した。『須坂市域の史料目録』の連番整理番号「057」（57番目）に位置づけ、史料番号は「057-1」から始めて整理番号を貼付した。原則として時系列により配置した。史料点数は363点である。

4 目録作成にあたっては、史料の保存状態・形態を考慮しながら、史料利用の便宜を考えて、つぎのように整理した。

(1) 史料名は原則として史料の表題を記載したが、表題のない史料は目録作成者が内容を検討して記載したものもある。

(2) 記などの表題で内容の適切な表示が必要な史料は、内容を概括して記載した。

(3) 史料形態については、横（横帳）、横半（横半帳）、縦（縦紙）、紙（一紙）、綴、括などと記載した。

5 史料の整理、文書目録の作成は、市誌編さん専門員井上光由が行なった。

（編さん主任：青木廣安）

2012年12月12日

須坂市誌編さん室

牧久雄家文書目録追加分2と目録作成について

1 本文書は牧久雄家文書目録追加分2の史料である。

2 時系列でなく二代牧茂助の家業である製糸業と牧畜業、共同出資の川東鉄道、上信物産会社および牧茂助家の家屋建築用材・図面、上高井郡所得調査員の調査内容を、それぞれに袋入れした史料の配置を優先して目録を作成した。

3 以下、袋入れした史料を中心に諸事業の概要をまとめた。

明治6年（1873）、牧茂助は若年で生糸改会社社長に就いたが、19年に生糸業組合に改組され引き続き上高井組組長に推された。翌20年には東京府外九県連合繭生糸織物共進会の繭審査委員に推されている。明治24年6月、牧茂助は東行社

から独立し、以来独自に原料繭や石炭を各地から移入して優良糸の製造に努めた。

明治36年(1903)7月、大日本蚕糸会から推薦され、米国のセントルイス万国博覧会に生糸7kgを出品して代金54ドルを得ている。当時、茂助は本家の牧新七と共に生糸を米国ニューヨークに直接輸出していた。しかし順調だった本業の製糸業は、大正9年(1920)前半期の糸価大暴落により閉業に至った。

明治20年(1887)には牧畜業を始め、乳牛の売買・貸付、牛乳販売を行っている。

明治30年(1897)7月、甲州財閥雨宮敬次郎の主導で(仮称)川東鉄道敷設の計画が持ち上がり須坂一中野間の測量まで進んだが、地元の賛助者が少なく断念に至った。

明治31年(1898)には、「上信物産会社」を遠藤万作とともに立ち上げ、後の須坂硫黄株式会社の設立に先立つ索道敷設工事が計画された。米子硫黄鉱山から現、群馬県吾妻郡嬭恋村千俣に至る間で、当時千俣区の国有林内の工事許可を得るのに苦労した様子が史料からうかがえる。

明治38年(1905)7月に上高井郡所得調査委員に推され、郡内各町村の農家・商工業者等の所得調査を42年まで行っている。

現在、市内横町通りに大壁の二階建ての牧久雄家の店舗兼主屋が建っている。建築用材は、明治32年(1899)から広く上下高井郡内から買い求め、柱や梁など家屋の骨組みになるケヤキ・杉・松などの用材には寺社などの古木を用いている。家屋を支える土台は「ぼたもち積み」で百々川から採集した石が使われている。明治35年(1902)ごろに広い敷地内の付属建物を含め建造を終えた。

4 これら現存する史料を「牧久雄家文書目録追加分2」として目録を作成した。『須坂市域の史料目録』の連番整理番号「057」(57番目)に位置づけ、史料番号は「057-Ⅲ-1」から始めて整理ラベルを貼付した。史料点数は424点を数える。

5 史料目録の作成に当たっては史料活用の便を考慮して、次のようにした。

(1) 史料名は、史料中に記載された表題を記載した。

(2) 史料形態については、次のように略記した。

紙(一紙)、冊(冊子)、束(紙を束ねたもの)、括(紙を括ったもの)

5 本史料目録は、牧久雄家のご理解とご協力を得て、須坂市文書館の専門員 井上光由が作成した。

2019年11月29日

須坂市文書館